古民家三百年の温もり

この家について、説明を求められることが多いので、書いてみました。この家の殆どの部材は、富士山麓の富士吉田・旭地区の渡辺家住宅のものです。同地区浄土真宗如来寺から４００年前に分家した旧家で、その地域一帯に残る古民家のなかでは最古、築３００年の伝承を持っています。その地方特有の切り妻風の兜造り茅葺き屋根、養蚕農家特有の構造で、１階が土間、囲炉裏の板の間、４室の座敷の間で構成された居住空間で、シーズンにはすべての畳を外し蚕作業に使い、２，３階は蚕作業専用の板の間でした。３階では見事な小屋組の合掌作りを見ることが出来ました。今は殆どいなくなった‘手こわし’のできる解体職人（当時７０歳）が小さな部材まで全てを使えるように解体してくれ、その部材を使いましたが、渡辺家の部材だけでは足りず、赤城山麓の関根家住宅の解体の機会を得て、大黒柱、小黒柱や数本の梁、玄関の大戸を頂きました。関根家は、明治期の２階建ての一般的な養蚕農家でした。１９９８年完成記念コンサートにはご両家をご招待しました。

狭い敷地のために元通りにする復元ではなく、間取りなど一部復元を含むほかは新たに再生させたものです。地震や火災への対応のため、重量鉄骨構造とし、外壁など外観も通常のビル建築としていますが、玄関をくぐると異空間の古民家という感じになります。玄関の大戸は、大型農具の出し入れが出来るものですが、普段は潜り戸で行うものです。玄関脇の格子窓は蔵の窓で鋸で切られないように鉄棒がついています。１階南側半分が渡辺家住宅の再現で大黒柱に太い梁、床の間の座敷、入口の板の間や廊下の板は、渡辺家の板の間の板で一部に木挽きさんの大鋸の挽き跡が見られます。北側半分はコンサート空間のため、新しいデザインです。そこへの入り口は蔵の内戸（手編みの金網は外してあります）。ステンドグラスは、都内にあった大正期の洋館のもの。コンサート室の大黒柱と小黒柱は関根家住宅のもの。普段は、仕切りに古い建具が張り巡らされ、そのうちの中央の仕切り戸は、身延山寺院客殿の慶応２年の銘のあるものです。中央の天窓までの吹き抜け１階には小さいながら坪庭で、飛び石、濡れ縁、井戸（昔の井戸職人による手掘り）があります。コンサートのときは板張り、冬には更に畳を張ります。吹き抜けにある５つの透かし彫りは大正期、１階吹き抜けの神棚は江戸中期の博物館級の貴重なもので、鳥取因幡の国府地区で明治期まで６代続いた大庄屋のもので故あって譲り受けました。座敷は聚楽壁ですが、３階まで殆どは漆喰壁です。１階のトイレドアは、大正期の室内電話ボックスのもの。２階の１２枚の襖は、慶応２年の銘のあるもの。その他３階までの建具は、様々な形態の古建具を使っています。階段は、古民家特有の急階段です。

なお、吹き抜けの手掘りの井戸は浅いので、庭にボーリングした井戸で“地下深層水”を得て、お茶やコーヒーに使用しています。近くの「お鷹の道湧水群」は環境庁名水百選に選ばれています。

この家は、主の骨董趣味、昔の生活への憧れ、家族中心の生活の楽しみ方に加え、クラシック演奏家のための会場づくりを目的にし、奇しくもコンサート専用ホールではない、家庭という生活空間での本格的演奏会として西欧の“ハウスコンサート”にならうこととなりました。「りとるぷれいミュージック」の名称で、１９８３年からボランティア運営され、２０１７年１２月には発足３５年目、第１９４回を迎えます。ささやかな造作ですが、都会では珍しくなった日本的空間のため、外国人演奏家の出演も多く、これまでに、エリザベート国際コンクール審査員など高名な演奏家や若手演奏家など７カ国１６人が出演されました。この間のコンサート活動が評価され第１３回志鳥音楽賞が授与されました。知る人ぞ知るに任せ、個人宅のため、取材もお断りしてきましたが、主の定年を迎えて、ＮＨＫテレビ芸術劇場、音楽の友誌、読売テレビ情報番組や産経新聞文化欄、その他文化雑誌でも紹介されました。そのうえ、この会場を使いたいとの要望を頂くことがあり、使用目的が適えばご使用願っています。

ここまで参加できる！解体から古色づけまで、丸ごと家づくり体験

中学生の頃から骨董好きで、古民家に憧れていたという小俣さん。素人でも好きだったら、本格的に古民家再生に参加できることを実践してみせた。解体の際に、小俣さんはこの家を細かくスケッチし、新しい家づくりのイメージを固めた。そして、夫人と二人で番付け（印付け）の作業も行った。しかし、大きな古民家をそのままの床面積で東京に移築するのはむずかしい。小俣さんは、これらの古材を無駄なく使って、地震や火災に耐えうる家をつくって欲しいと、地元の親しい棟梁（大勝工業／勝呂勝氏）に頼み込んだ。運び込まれた古材は洗いすぎないように埃を落とし、その際に出た煤もとっておいて、新しい部材の古色づけに利用した。これには家族全員で参加し、壁の漆喰塗りには、小俣さんが左官の指導を受けて参加した。内部の設計図は無いも同然で、小俣さんのイメージ図をもとに、棟梁が小俣さんと話し合いながら進めた。その結果、完成までに１年半を要した。

２００１年　平凡社「別冊太陽／古民家再生術」所収